

## 『フロッピーディスク』

宮杉 浩

皆さんがレポートや文書を作成した時に保存するメディアとして馴染みのフロッピーディスク(略称FD)。今回はそんなフロッピーディスクのお話をいたします。

フロッピーディスクとは磁気ディスクの一種で、磁性体を塗布したプラスチックの薄い円盤を駆動装置で回転させ、信号を記録する媒体で、プラスチックの保護ケースに入っています。一般的なハードディスクと異なり、駆動装置から媒体を取り外せることが大きな特徴となっています。一般的に「フロッピーディスク」もしくは単に「フロッピー」と呼ばれていますが、開発元の一つである米国IBM社を中心に「ディスクレット(diskette)」と呼称され、日本工業規格(JIS)では「フレキシブルディスク(カートリッジ)」という呼称が定められています。

フロッピーディスクの歴史を紐解いてみますと1970年にIBM社によって開発された8インチ(200mm)容量128キロバイトのものが最初とされています。以降様々なメーカーによって様々なタイプのフロッピーが登場しましたが、現在は皆さんお馴染みの3.5インチ(90mm)ディスク(最大記録フォーマット1.44メガバイト)が主流となっています。

私が図書館に配属になったばかりの頃の図書館システム(現在の図書館システムNewLibとは別のシステム)では5.25インチ(130mm)のフロッピーを用いていました。皆さんはほとんど見たことが無いでしょうが、今の3.5インチFDより大きくて、しかも保護ケースが薄いので、あまり丈夫ではなく、ディスクは必ずオリジナルとバックアップの2枚を作成していました。社会的にもそのような事から3.5インチFDが主流となっていた事が考えられます。因みに8インチFDも使用していた時期があったそうで、私も実際見たことがありますが、大きすぎて持ち運びにも、保管にも不便なものだったという印象を持った覚えがあります。3.5インチFDとの違いとしてよく覚えているのが、両面に書き込みができた事です。現在とはパソコン本体の処理速度が比べものにならないくらい遅い時代でしたので、フロッピーをドライブに差し込んで保存を開始すると「カタカタカタ…」という音を立てながらゆっくりと書き込んでいた様子が懐かしく思い出されます。

フロッピーディスクはそのコンパクトさと、ほとんどのパソコン本体にドライブが内蔵されていた強みを生かして、MOディスクなどその他のメディアを寄せ付けず、長年にわたって活躍してきました。しかしパソコン本体の高速化と大容量化によって、音声や画像、動画などのマルチメディア素材を扱うが多くなってくると、記憶容量の小さいフロッピーは徐々に衰退の道を歩み始めます。最近のパソコンにドライブが内蔵される事もほとんどなくなりました。そしてUSBを利用した大容量記憶媒体の出現と普及によって、その役割を終えようとしています。次回はフロッピーに取って代わる存在として急速に普及してきたUSB外部記憶装置についてお話ししたいと思います。

みやすぎ ひろし(管理運営課)